

山代温泉

市之瀬用水

を歩く



380年間、
生活用水、
農業用水として
人々と水田を潤してきた
「命の水路」。

写真・文 タカヤナギユタカ

江沼平野を潤す市之瀬用水

猛暑となった今年の夏。8月16日、山代温泉で万灯会が行われたこの日、加賀市の大聖寺川と動橋川に挟まれた江沼平野の水田には稲が青空に向かって青々と育っていた。

大聖寺川右岸から取水し、大聖寺川に沿うように二天、別所町へと進み、河南から山代温泉の街中を蛇行するように通る市之瀬用水は全長約8.3キロ、大聖寺川と動橋川の間広がる江沼平野の水田約550ヘクタール(東京ドーム約120個分)を潤す。

この用水は、約380年前の寛永2年(1625年)に加賀藩郡代吉田伊織が、山代領に新田を開くため久世左衛門宗吉に用水工事を命じたのが始まりとされ、その後寛永16年(1639年)、前田利治による大聖寺藩創設時にはほぼ完了し、寛文5年(1665年)2代藩主前田利明の時に補修工事が行われ、およそ40年もの歳月を費やしてその全体が完成している。

地球10周分の用水路が稲作文化を支えている

日本の稲作農業は様々な問題を抱えたままだけれど、日本では、古代から連続として水田を中心とした国造りが行われてきた。水田は多量の水を必要とするため、先人達は何キロも、時には何十キロも離れた川から用水を引いた。

日本の用水路の歴史は、弥生時代頃に稲作文化とともに伝来した農業用水が起源であったと推定されているが、近世になると稲作の技術が発展し、また諸藩の大名が石高の向上のために、新田開発を盛んに進める必要から稲作のための水の確保を重要課題として、川や湖などからの引水が難しい内陸部への農業用水を引くための用水が日本全国、それこそ網の目のように造られるようになる。その延長は、なんと40万キロ、地球10周分に相当すると言われている。



加賀山中大橋から見た大聖寺川の取水口。岩を掘り抜いた二つの隧道があり、30の穴が開けられている。工事中に出る岩石や土をそこから外部に捨てる。その後、光採りの役目を果たしたところから「窓」と呼ばれているそうだ。造営当時の緻やツルハシの痕が残っていて、先人の苦勞が偲ばれる。



加賀市別所町付近を流れる市之瀬用水。左奥に広がる河南町の水田を潤す。